

訪問歯科レポート ～訪問歯科の現場に同行しました～

Case1 退院後の豊かな暮らしを支えるため

9年前に脳出血で入院し、現在は自宅で左手足の麻痺のリハビリを続けるAさん(53歳)。1年前に顎の痛みで食事が難しくなり、担当医経由で当院に相談がありました。この日は開口や舌のリハビリを中心に、首や肩の筋肉群の運動も行いました。「咀嚼筋は首まわりの筋肉と共同で動くこと、また、飲み込みには姿勢維持が大切なため、口腔以外についても診ていきます」と角田先生。時にはリハビリ職の方から学ぶこともある

そうです。「リハビリについて疑問がある時は、こちらからリハビリ職の先生にアプローチします。待っているだけでは誰も教えてくれません」。

Aさんは在宅訪問歯科が毎週あることについて、「生活の雰囲気明るくなって気持ちに張りが出ます」と言います。大手総合商社に勤務していた経験を活かし、今は自宅で経理事務の仕事をお願いするAさん。「要支援や要介護の患者さんにも仕事があり、散歩もして、こんなに豊かな暮らし

があります。病院での治療が終わったら終了ではなく、本当の勝負は退院後なんです」と角田先生は話します。



スムーズな咀嚼や嚥下にはポジションングも重要。首や肩まわりの筋肉群の運動を行う。

Case2 覚醒しない患者さんへの対処

パーキンソン病を患うBさん(92歳)はクラウンの脱離をきっかけに在宅訪問歯科をスタートしました。主訴に対する治療が終了した後、歯科治療の終わりを示唆された奥様に対して、角田先生から訪問の継続を提案されました。「パーキンソン病により嚥下障害から栄養低下を引き起こすこともあるため、口腔機能と摂食嚥下機能の維持は重要であることを説明いたしました。すぐに奥様、ケアマネジャーとともに歯科介入の継続にご理解をいただきました」。

Bさんは在宅訪問歯科を毎週楽し

みにしていますが、この日はなかなか目覚めてくれません。バイタルチェックのほか、今朝の食事や排泄の様子を奥様からヒアリングした後、角田先生は担当医科クリニックの相談員に電話します。「ただの疲れなのか、原疾患の進行の症状の一つなのか私にはわかりません。だからこそ、こういう際にはすぐに医科へ状況を伝えます。歯科からも声を上げておけば、先生方も注視してください」。

ほどなくして目を覚ましたBさん。奥様は在宅訪問歯科について次

のように話します。「歯の状態が良く今朝も牛肉を食べましたし、毎晩、晩酌を楽しんでいます。先生たちが明るく話しかけてくださるので私たちも気持ちが明るくなります」。



Bさんの口腔ケアの様子。この日は口腔ケアの他に、破損した部分義歯の相談も受けた。

Case3 年齢に合わせた歯科治療

2年前の大病をきっかけに在宅訪問歯科を受けるようになったCさん(91歳)は、口腔内にいくつかの残根があります。心臓疾患があることや年齢を考え、角田先生は抜歯を提案していますが、本人の強い希望により、残根上義歯で生活を送っています。

この日はクラスプが壊れていたため、応急的に義歯を直し、次回訪問時に印象を採ることに。「高齢者にとって、食事摂取に影響があると生活の質の低下に大きくかわることもあるため、必ずその場で噛める状

態まで応急処置を行います。また、壊れた原因を探り、今の口腔内の状態に合わせて義歯を調整することも大切です」。

Cさんには、かかりつけ歯科医がいましたが、ケアマネジャーに相談し、角田先生を紹介してもらったそうです。Cさんは「それぞれの患者に合わせてどうすればいいのかという軸に立って考えてくださるので、ありがたいと思っています」と角田先生の印象を話します。

どの患者さんも角田先生たちの訪

問を楽しみにされていました。そして、診療を受けることで食べられること、元気になれることに感謝を述べていたことが印象的でした。



「患者のことを第一に考えてくれるスタッフの皆さんに感謝です」とCさん。

角田先生とともに、訪問歯科診療に携わるスタッフの皆さんにお聞きしました



合同会社
ラソンプレ 代表
鈴木 淳子
(看護師、介護支
援専門員)

入院した高齢者が在宅復帰をする際に専門職が集まってケアプランを立てますが、そこに歯科がないことにずっと違和感を持っていました。口腔の観点から抜けていると、しっかりとした栄養が取れず、再び病院に戻るようになります。地域包括ケアを成立させるために、歯科の先生方には旗振り役として、もっとこの分野に携わっていただきたいと強く願っています。



勤務医
武智 小桃

角田先生が行う在宅訪問歯科診療で驚いた点は、どんなにひどい状態の義歯でも、その場で食べられる状態に治してしまう技術です。また、患者さんの生活まで見据えて義歯を製作・調整することにも目から鱗が落ちる思いでした。

在宅訪問歯科は外来とは違い、使用できる器具が限られ、臨機応変さが求められます。スキルを磨くためにも若い先生にこそ、在宅訪問歯科の現場を知って欲しいと思っています。



歯科衛生士
橋本 広美

高齢化が進み、歩行困難な方や口腔状態が悪い方が増えています。100歳以上の方も珍しくないため、体調の異変は見逃さないように注意しています。高齢の患者さんと接することに躊躇する歯科衛生士もいるかもしれませんが、患者さんを病人として見るか、一人の人間として見るかの違いだと思います。一緒にお茶をするなど患者さんとの交流は楽しく、そうした関係性を作り出せる在宅訪問歯科にはやりがいが多くあります。



歯科衛生士
橋本 直美

訪問先では名前を覚えてくださる方が多く、「今日はなおちゃん来るの?」と電話をいただくと、頼りにされているのを感じ、嬉しく思います。在宅訪問歯科は患者さんの自宅で行うため、患者さんやご家族との距離がとても近くなります。人と接することに楽しさを感じる方であれば、楽しい仕事だと思います。



歯科衛生士
伊藤 真奈美

患者さんはこちらの訪問のために時間を調整してくださっているの、なるべく時間通りに進められるように心がけています。ただ、約束の時間に伺っても患者さんがいらっしゃらない場合があります。その時には安否確認を急いで行います。

部屋に上がると患者さんの心肺が停止していて、角田先生と交互に心臓マッサージをしたことが一度ありました。無事に一命を取りとめた時はホッとしました。在宅訪問歯科はキャリアという点でも、さまざまな経験が積める仕事です。



歯科衛生士
岩崎 静乃

前職で病院勤務をしていた頃は、退院しても戻ってくる患者さんが多いことに疑問を感じていました。在宅訪問歯科に携わるようになり、多くの患者さんは全身管理や生活のことに手一杯で、口腔衛生まで気が回らないのだと感じています。だからこそ、もっと多くの歯科医院がこの分野に携わって欲しいと思っています。在宅訪問歯科は歯磨きをするだけのイメージの方もいらっしゃると思いますが、実際には口腔にまつわるさまざまなサポートをします。ご本人もご家族も歯科に希望を見出す方が多く、そうした医療を今後も提供できるように頑張りたいと思っています。



歯科衛生士
加納 春香

外来とは異なり、在宅訪問歯科は限られた人数で対応しなければならず、歯科衛生士業務はやる事がたくさんあります。その分、活躍の場が多く、やりがいを感じています。患者さんとの交流もこちらが癒される場面が多々あり、充実した毎日を送っています。

角田先生のお話は「DENTAL LIFE DESIGN」でもご覧いただけます。デンタルマガジンで載せられなかったお話も掲載。ぜひそちらもご一読ください。

